

2018年12月12日(水)

経営史応用研究 詳細シラバス

平野恭平

講義のテーマ・目的

この講義では、日本経営史を主たるテーマとして、各産業・企業の競争や経営のあり方とそ
の変質を検討します。この講義では、史実を1つ1つ詳細に追うこと以上に、大きな歴史
の流れを捉えることを重視します。各産業・企業の競争や経営の共通点と相違点、時代とと
もに変わる競争や経営のあり方などを理解してもらい、企業経営の歴史に対する理解を深
めることを目標とします。

講義スケジュール

第1回(1月12日)

- ・前半：ガイダンス、歴史的視点、経営史の方法

歴史的視点の意義を考えた上で、経営史とはどのような学問であるのかを考えます。経営史
とは、単に歴史の対象として企業やその経営活動を取り上げるだけなのでしょうか？経営
史の創始者N・S・B・グラーズは何を意図していたのでしょうか？それらを考えることか
ら始めます。

- ・後半：江戸時代の経営、明治の企業家活動

明治期、東京や大阪では、新時代のビジネス・チャンスをつかもうと多くの企業家たちが躍
動していました。彼らはどのような人々であったのか、何を成したのか、いくつかの類型に
分けてみていくことにします。また、彼らの企業家活動を支えるものとは何だったのかにつ
いても考えます。現代日本は他国に比べると起業家が少ないともいわれますが、明治期と比
べた時、どのようなことがみえてくるのでしょうか？

第2回(1月19日)

- ・前半：近代産業の勃興と経営

近代産業の代表例として紡績業を取り上げ、技術と経営管理の2つの面から発展過程を探
ることにします。前者では、「中間技術」や「適正技術」の視点から近代技術の移植を捉え
る必要があります。後者では、若年女性労働者を多用した紡績業の労務管理をみていきま
す。近代産業が発展を遂げていくには、マネジメントの力が必要でした。

- ・後半：財閥の多角化と組織

A・D・チャンドラーの「組織は戦略に従う」という有名な命題があります。日本のビッグ
ビジネスの代表格である財閥についても、この命題は成り立つのでしょうか？また、チャン

ドラーがいう経営者資本主義は、財閥経営でどのように実現されたのでしょうか？三菱や三井といった大財閥を中心に考えてみたいと思います。

第3回（1月26日）

・前半：大戦ブームと企業経営

第1次世界大戦は、多くの日本企業にビジネス・チャンスをもたらしました。船成金と呼ばれた人々が現れた大戦ブームとはどのようなものであったのか？そこでの経営はどのようなものだったのか？大戦ブームが過ぎ去った後、彼らはどうなったのか？そこにみられる経営上の問題とは何だったのか？これらを神戸で活動した2社の事例で考える予定です。

・後半：戦前の技術導入と研究開発

技術進歩の早い電気機械工業では、外国企業と提携して技術開発能力を高めようとする動きがありました。日本の技術発展の歴史を振り返ると、外国からの技術導入が果たした役割が大きかったことは否定できませんが、それだけでしょうか？外国企業の国際経営戦略にも関連するものであったため、戦前のグローバル化と合わせて明らかにします。また、関連として、戦前の日本企業の国際経営についても、本当に帝国主義的に考えてよいのか再検討します。

第4回（2月2日）

・前半：日本的雇用システムの形成

第1次世界大戦頃から、サラリーマンといわれる人々が登場するようになりました。その登場の背景には、希少なスキルをもった人材をいかに獲得し、長く働いてもらうかを考える日本企業の人事管理がありました。そのような人事管理を明らかにします。加えて、日本の実業教育制度と高等教育制度の変遷も追うことにします。

・後半：都市化・洋風化と新ビジネスの誕生

産業社会化と都市化は、新しいビジネス・チャンスをもたらしました。それまでの日本にない新製品や新サービスを提供する都市型ビジネスを手がける企業家たちは、どのような方法で市場を切り開いたのか？両大戦間期に現れた大衆消費社会とはどのようなものでしょうか？

第5回（2月9日）

・前半：重化学工業化と新興コンツェルン

第1次世界大戦以降、日本でも重化学工業化が進展します。電力業に牽引される形で電気機械工業、電気化学工業、電気精錬業などが成長を遂げます。リスクを取ることを恐れず新産業の勃興に賭けた企業家たちの活動とコンツェルンの形成過程を追います。また、戦争と企業活動についても取り上げたいと思っています。

・後半：戦後の経済民主化と企業変革

財閥解体、労働民主化、農地改革の3つからなる経済民主化は、戦後の社会経済に大きな変化をもたらしました。連続説と断絶説で見方が違うことにもなりますが、連続と断絶のバランスの中で捉えるとよいのではないかと考えます。戦後の経営史に入っていくに際し、戦後

日本経済の出発点からみつめ直します。

第6回（3月2日）

- ・前半：日本的生産システムの形成

日本的生産システムの代表としてトヨタ生産システムを取り上げます。トヨタ生産システムが形成されるまでには、日本の技術者たちの様々な試行錯誤の痕跡がみられます。戦時期の航空機生産に限らず、明治期の紡績業の生産システム構築の挑戦にまで遡ります。アメリカとは違った歩みをもせた日本の生産システム形成の歴史を明らかにします。

- ・後半：大衆消費社会の到来

高度経済成長期、大量生産と大量販売を結びつけて総合家電メーカーを目指した企業家もいれば、独創的な商品を創り出し、新市場を開拓する企業家もいました。しかし、その中には、優れた技術をもちながらも、それを生かせず競争から落伍していく企業もありました。それら企業の競争を明らかにします。

第7回（3月9日）

- ・前半：流通のイノベーション

林周二の『流通革命』で主張された点は、高度経済成長期にスーパーが台頭する中で実現されたのでしょうか？スーパーの成長過程では、伝統的な流通機構や大手メーカーとの対立もみられました。このスーパーに次いで、コンビニエンス・ストアが登場し、新たな主役として成長していくことになります。流通・小売業の変革をみていきます。

- ・後半：日本的経営とその変容，社史・企業史料・産業遺産

最後に、日本経済のパフォーマンスとともに評価が大きく変化した日本的経営の歴史を振り返ります。また、残された時間で、経営史研究で用いる社史、企業史料、産業遺産などについても紹介します。このような史料がもつ価値と意義を正しく理解してもらい、史料を利用する側と、史料を作る側・残す側の相互理解が進めばよいと考えます。

第8回（3月16日）

- ・期末試験

教科書

- ・特に指定しない

参考文献

- ・宮本又郎・阿部武司・宇田川勝・沢井実・橘川武郎『日本経営史 江戸時代から21世紀へ』新版，有斐閣，2007年。
- ・宮本又郎・岡部桂史・平野恭平編『1からの経営史』碩学舎，2014年。
- ・経営史学会編『日本経営史の基礎知識』有斐閣，2004年。
- ・経営史学会編『外国経営史の基礎知識』有斐閣，2005年。

成績評価

- 期末試験 100%